

Title	意志と意図
Author(s)	堀田, 知子
Citation	Osaka Literary Review. 16 P.11-P.20
Issue Date	1977-11-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25652
DOI	10.18910/25652
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

意志と意図¹⁾

堀田知子

0. はじめに

ある動作、行為や現象を知覚、認識して、それを記述する際、話者は何らかの意図²⁾ (intention) をもって、主語の意志性を文中に盛り込む。対象が自然現象や物理現象である場合と異なり、意志を持つ主体が行なった動作、行為について記述する場合には、種々の問題が出てくる。動作主 (agent) の意志を話者がどう扱うか、という問題もそのひとつである。本稿では、文中に表わされた主語の意志 (volition) と、それを表わす際の話者意図との関係を考察する。

1. 統語的考察

文の意志性の決め手となるのは、manner adverb (様態の副詞) と動詞であるので、これらを順に見てゆくことにする。

1.1. manner adverb

manner adverb には、+Volitive という意味素性を持ち、その文が有意志であることを示すもの (ここでは+volitive manner adverb とよぶ) と、-Volitive という素性を持ち、その文が無意志であることを示すもの (-volitive manner adverb) の二種類がある。前者の例として、deliberately, enthusiastically, carefully, reluctantly, intentionally, with care, on purpose, etc., 後者の例として、accidentally, unconsciously, involuntarily, by chance, by mistake などがある。次に、これらの文中

での現われ方の例を示す。

- (1) (a) John opened the door *carefully*. (+volitive)
 (b) John opened the door *accidentally*. (-volitive)
- (2) I've left him *purposely* to the last.
- (3) I fancy that he was walking slowly *on purpose*.
- (4) As I stood there holding it, I *involuntarily* wrinkled my nose in displeasure.
- (5) Or else she left it here *by mistake*.

目的節も、+volitive manner adverb 同様、文の有意志性を表わす。

- (6) (a) John deliberately trod on the toy *in order to punish the child*.
 (b) ? John accidentally trod on the toy, *in order to punish the child*.
- (7) She opened her tight-shut streaming eyes *to see who this person was*.

他にも、意志性を示す副詞句がある。

- (8) *And realizing this*, she raised her voice and spoke more clearly.
 (+volitive)
- (9) Becky opened her eyes *with a start*. (-volitive)

1.2. 動詞

意志性に関して、動詞は三種類に分類することができる。+Volitive という素性をもつ +volitive verb, -volitive という素性をもつ -volitive verb それに、文脈等、他の要素により意志性を決定される ±volitive verb である。

(a) +volitive verbs

murder, assassinate, try, look (at), listen (to), seek, read, speak, sell, buy, deceive, lie, forgive, performative verbs, etc.

(b) ± volitive verbs

open, break, kill, annoy, frighten, hit, please, heat, tread, delay, drop, cut, etc.

(c) - volitive verbs

know, think, forget, belong, contain, resemble, see, hear, die, become, sneeze, drown, sleep, shiver, etc.

これらの動詞の、統語上の性質を調べるために、次のようなテスト³⁾を行なう。

(i) 命令文に用いられるか。

(ii) persuade (remind) 補文に用いられるか。

(iii) manner adverb との共起関係はどうか。

(9) (a) *Listen* to me.

(b) *Break* the window.

(c) ? *Sneeze!*

(10) (a) They persuaded him to *sell* the land.

(b) They persuaded him to *open* the door.

(c) ? They persuaded him to *know* the answer.

(9) (10) からわかるように、+volitive verb, ±volitive verb が命令文, persuade 補文に用いられるのに対し、-volitive verb は用いられない。また ±volitive verb がこれらの文において用いられると +volitive になる。次に、manner adverb との共起関係を見てゆく。大部分の動詞は、対立する素性をもつ manner adverb とは共起しないが、中には共起して、それ自身が本来持っていた意志性を変えてしまうものがある。

(11) (a) ?She *looked* at him *unintentionally*.

(b) Tess and Clare *unconsciously studied* each other,...

(12) (a) ?He *knows* the answer *consciously*.

(b) *Desperately* he *snored* and *snored*.

また、同じ素性をもつ manner adverb と共起した場合に、余剰性 (re-

dundancy) を生ずるものと生じないものがある。

(13) (a) She *withheld* the information from him *on purpose*.

(b) ? She *tried* to open the door *on purpose*.

(14) (a) *In spite of myself*, I *shivered*.

(b) ?He *fell down unintentionally*.

このことより、同じように + Volitive, 或いは - Volitive という素性を持つと言っても、個々の動詞, または文脈によりその現われ方は一樣でないことがわかる。このような違いの体系的説明が可能になれば, +volitive verb, -volitive verb といった分類の方法自体も考え直すことになる。

2. 語用論的考察

2.1. 話者の視点—動作か状態か

前章で, 動詞や manner adverb を, +volitive, -volitive というように分類したが, 問題はそう単純ではなく, 実際には文の意志性には, 話者の意図や視点のあり方が, 微妙に関与している。

(15) John ate an olive.

この文は, +volitive verb を主動詞としているにも拘らず, その意志性は ambiguous で, 次の二つの解釈が可能である。ひとつは, John が初めからオリーブと知って食べた, という動作そのものの記述 (+volitive) であるとする解釈であり, もうひとつは, John が何か他のものと間違えてオリーブを食べてしまった, という, agent の意図した別の動作の結果の記述 (-volitive) である, とする解釈である。後者の場合, この文の真の意味は, John ate X which was an olive. であって, John ate X まだが John の意志的行為である。動作主の意図した動作とその結果が必ずしも一致しないことや, 意図は違っていても, 結果的には同じであることが, ambiguity の原因である。このように, 動作記述と状態(結果)の記述が, それぞれ有意志と無意志に対応していることが多いが, それは

また、誰の立場からの記述か、という問題でもある。厳密に言うと、他人の動作を正しく記述する、ということは、動作主の心の中まで知らなくては不可能である。⁴⁾ 意志とは *private* なもので、本人以外には本当のことはわからないからである。従って、動作を記述する場合、話者の視点は動作主にあることになる。一方、結果としての状態は、*agent* の意志とは無関係に生ずるものであり、客観的事実として誰の目にも明らかであるので、それを記述する場合には、話者は客観的立場に立っているといえよう。このように、他人の動作の記述に関しては、複雑な問題があり、それは単に有意志、無意志ということだけでなく、ある動作、行為に対してどういうことばを与えるか、という問題にも発展してゆく。

2.2. ±volitive verb の二面性

(16) \bar{J} John broke the window.

この文は、主動詞が±volitiveで、contextの手がかりもないので、次の(a)(b)どちらを意味しているのかambiguousである。

(17) (a) John deliberately broke the window.

(b) John accidentally broke the window.

(a)はJohnが「窓を割る」という目的をもって何らかの動作を行なった、という意味であり、(b)はJohnの、別の目的で行なった動作が、偶然窓が割れる、という結果を引き起こしたことを意味する。つまり、(b)は、John did X, by which the window became brokenが短絡を起こしたもので、Johnのvolitionのscopeは、John did Xまでであり、その結果はJohnの意志とは無関係である。これを話者の立場から分析すると次のようになる。動作主Aが、Xという動作を行ない、Rという結果が生じたとする。この場合、AがX→Rという因果関係を予期、或いは承知の上でXを行なったと解釈すれば、A caused R deliberately, となる。一方、X→Rを予期せずにAがXを行なったと話者が解釈すれば、A caused R accidentally, となる。⁵⁾ ±volitive verbの特徴は、動作と

結果の両方を表わすことができる、という点で、それが *ambiguity* の原因ともなっている。動作の記述か、結果である状態の記述かがわからないからである。しかし、話者自身、動作主の意図を知らなかったり、知っていてもそれを伏せておく意図で、この動詞のあいまい性を利用して、このようなぼかした表現をとる、ということも無論考えられる。

(20) John annoyed me.

この文も、やはり *John did X, at which I was annoyed* が縮まった表現であるが、このような人の感情を表わす動詞の目的語が話者である場合、主語の行為によって生じた、目的語の感情を表わしたものであって、もともと意志はないと見るべきで、話者が自分の感情の原因を主語に帰そうという意図をもって、John を主語に、自らを目的語に持ってきたものである。⁶⁾ 次に挙げる例も同様である。

(21) "I to you offer two thousand."

"You tempt me, Baron you tempt me."

(22) God, these young fellows nowadays make me sick.

(23) My husband bored me to distraction.

これらの動詞が、命令文や *persuade* 補文において用いられるとどうなるであろうか。

(24) (a) He persuaded me to please her.

(b) Annoy Mary.

(c) Let's frighten the baby.

これらは、それぞれ

(25) (a) John persuaded me to do something at which she might be pleased.

(b) Do something at which Mary might be annoyed.

(c) Let's do something at which the baby might be frightened.

という意味であり、この *do something* までが有意志になる。

このように、+volitive verb や、±volitive verb を主動詞とする文の

意志性がマイナスになる場合、動作と結果とが短絡をおこしてひとつになっている。つまり、action part の主語が結果の部分の主語にきているということがわかる。

3. 無生物主語

3.1. 無生物文の統語的、意味的構造

原則として、無生物主語は、主語に生物を要求する動詞や manner adverb とは共起しないが、無生物でも instrument⁷⁾ 格, patient/location 格である場合に限り許される。

(26) (a) ?*His desk wrote* the address; beyond any doubt.

(b) *His typewriter wrote* the address; beyond any doubt.

(27) *His eyes looked* into hers.

(28) *Five quick knocks* answered her.

(29) *His hat* went *carefully* on the next peg.

(30) *The words* slipped out *involuntarily*.

(31) *Bletchley's eyes* went round *seeking allies*.

(32) *Her eyes* opeved *in spite of herself*.

その他の場合には、擬人化表現になる。

(33) *The windows smiled, the door coaxed and beckoned, the creeper blushed confederacy.*

(32) *It was a shore that knew* the magic and mystery of storm and star.

また、無生物主語と、有意志性のみを強調する manner adverb とは共起しない。

(33) ? *His hat* went on the next peg *purposely*.

(34) ? *His eyes* went round *on purpose*.

これまでの例は、動作主が不明であったり、表わす必要がない場合に、無

生物主語が用いられたものである。

動作主が話者自身である場合には、その意志的行為の記述に無生物主語を用いることはできない。

(35) ?My eyes looked into hers.

(36) ?My hand pointed to a heap of cushions.

しかし、話者の無意志的行為（状態）を表わす場合にはこの限りではない。

(37) *My heart* beat a little faster.

(38) *My face* grew graver,...

(39) For a moment *my blood* ran cold, but his next words reassured me.

これには、意志の privacy 性や、無生物主語の無意志化の機能が関係している。

3.2. 無意志化

(40) “Don’t talk like that about Miss Bellever.”

“Sorry, miss *It slipped out.*”

これは、主語の位置にくるものが、常に agency を担う、ということを利用した表現で、自分の意志的行為を、無生物主語を用いることにより無意志化して、責任回避をしようとする話者の意図が感じられる。同様の例として、

(41) He did not mean to show it, I am sure, but it was so strongly in his mind that *it slipped out* at every action.

(42) *Words trembled* on her lips, but she forced them back.

なども、agency を無生物主語に吸収させて、意志性を消そうとした表現である。

このような、動詞の有意志性を消したり、マイナスにしたりする、という無生物主語の機能を証明するものとして、

(43) *The gleam of metal* caught my eye.

のような表現がある。これは *I saw the gleam of metal.* という無意志文に対応するもので、この他にも、

(45) *And suddenly a sound smote upon his ears.*

(46) *A fantastic notion occurred to me.*

(47) *The rest escape me.*

には、各々 *hear, think, forget* というような *-volitive verb* が対応する。このように、無意志の動作や状態を表わすのに、*-volitive manner adverb* や、*-volitive verb* の他に、無生物主語も用いられる。

無生物でも、自分の *energy* で運動できるもの、(植物、乗物、自然現象など) は、無意志ではあるが *agent* になりうる。⁸⁾ 例えば、

(48) *The lightning flashed.*

は、*physical* な *action* を表わす。しかし、

(49) *The lightning struck the house.*

の場合は、*The lightning flashed, and the house was struck.* が短絡をおこした表現で、不必要な動作部分が省略されて、その主語と結果の部分が結びついたものであり、*action* を表わす文ではない。

4. 結 論

文の意志性が、話者による語の選択と、その配列によって決定される以上、それは話者の意図の反映である、と言えよう。

(50) *You say I murdered Peter Carey; I say I killed Peter Carey; and there's all the difference.*

この文においては、*Peter Carey* なる人物を死なせたのが意図的であったか否かということが問題になっているわけであるが、このように同一の事象に出会っても、話者がそれをどう知覚、認識するか、或いはどういう *intention* を持つかにより、文の意志性、更には動作に対するレットルの貼り方そのものまでが異なってくる。ここでは問題を文の意志性だけにしぼったが、そうすると、他人の動作、行為を記述するということは非常に

むずかしいことである。一方、話者自身である場合、話者は authority をもって自分の動作を記述することができる。このように、文の意志の問題は、話者意図の問題と切り離して考えることはできないと思われる。

注

- 1) 本稿は、日本英文学会第46回大会（昭和49年5月4日）のシンポジウムで行なった発表に若干の修正を加え、論文としてまとめ直したものである。
- 2) 毛利可信『意味論から見た英文法』（東京：研究社、1972）、Ch. 36参照。
- 3) Lakoff, G. 1966. "Stative Adjectives and Verbs in English," *NSF-17*, Harvard Computations Laboratory.
- 4) 厳密には、動作だけでなく、know, think などの思考動詞、see, hear などの感覚動詞についても同様のことが言える。
- 5) 例えば、Aladdin opened the rock by saying "Open sesame!" については、明らかにアラジンは "Open sesame" ということばを発すれば岩が開く（X → R）という因果関係を知っていたと解釈されるので、この文は +volitive である。
- 6) Bowers, F. 1972. "The Structures of Affective Sentences in English." *Linguistics*, 86, Hague Mouton & Co. Lee, G. 1969. "Subjects and Agents," *Ohio University Working Paper in Linguistics*, 3.
- 7) Langendoen, D. T. 1970. *Essentials of English Grammar*, New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- 8) Cruse, D. A. 1973. "Some Thoughts on Agentivity," *Journal of Linguistics*, 9.